

一九七七年一月二十五日  
発行



第54卷 第6号

史学・地理学・考古学

鎌倉初期の公武関係……………杉橋隆夫 (1)  
——建久年間を中心に——

魏源経世思想考……………大谷敏夫 (33)

イギリス工業化と「旧帝国」……………川北稔 (76)  
——西インド諸島を中心に——

調査報告

京都向日丘陵の前期古墳群の調査……………京都大学文学部考古学研究室  
向日丘陵古墳群調査団 (116)

書評

千代田謙著：西欧自由主義史学の研究……………酒井三郎 (140)

紹介

---

史学研究会

京都大学文学部内

## 編 集 後 記

今年度の終末号五四巻第六号をお贈りするに当り、史学研究会この一年の越し方について若干の御報告をとりまとめておきたい。

われわれ現編集委員が本誌の編集を名実ともに引き受けたのは、まえにも若干ふれたがこの四月、正式には本巻第三号からであった。なにもかこの頃は、いえば端境期で、これも御報告がおくれていたが、まず理事長が四月三日前任者織田武雄教授の御退官にともない現理事長羽田教授にひきつがれた。史学科としてもこの三月は織田教授のほか赤松俊秀・有光教一両教授も御退官ということで、一時に淋しさを加えた季節であった。いずれも本会のため御尽瘁いただいた方々であること申すまでもない。御三方とも従来規約により内田吟風教授・中山治一氏とともに本会顧問となられた。ところでこの従来規約なるものであるが、これは本来財団法人設立を目的として数年前作成されていたものであったが、これと前後して前理事長より法人設立の不可測性と再建への方途の再考が提言されていた。こうして現理事長・理事會以下編集委員も、いってみればそ

の混沌を引き受けたような次第となったが、再三の会則検討を行ったにもかかわらず、若干の面を除いて最終的結論をみないままに、大部分の点においてはまだ現会則が生きているという法解釈に立っている点、まず御諒承頂ければと思う。しかし混沌といえ、なんとといっても会誌発行の遅れをとりもどすことであり、これがまたなかなか至難のわざであることを発見しつつある。しかし、法人設立という所期の目的が再考されなければならなくなつたいま、あるべき会則の作成とまた会誌の定期刊行への復帰といふこの二つの点は、なんとしてもやり通さねばならない——これがわれわれの念願でもある。なおこの四月その永年の御努力によつて史学研究会にとっては忘れがたい人となった熱田公氏ならびに八幡ひろみ女史もまた、御転勤と御退職のため去られた。しかし、これについては前にも若干ふれたことがある。熱田氏には御転勤後も本会の事務ひきつぎ、その他細かなことについてずいぶん御世話になった。改めて感謝の意を表さねばならない。

ところで四月以来ますますやらなければならなかつたことは、一方で『史林』刊行の編

集事務をスピード・アップするかたわら、ここ十数年現実には一本に纏められてきた編集・庶務・会計の三権を分化することであった。たしかに一個人、一研究室に三位の一体化することは機能面からいって望ましい面もあるにはあるが、それはまたややもすれば、当事者以外を無関心状態に放置し、ひいては編集委員でさえ各フィールドごとに応分の原稿を集めてこと足れりとする機械的存在に化さないという保証はない。ましてや最近の繁忙と教知れぬ発表誌のあることにおいておやである。ただ、われわれは鋭意編集会議を通して討論を重ねたことは付け加えねばならないが、無関心という時流へのおそれは依然スレトニングなものとして、われわれの傍らにあったし、またある。このことも付け加えておかねばならない。私を知るかぎりでの本会の歴史に照しても、この三権の分立はただ十年許りまえの状態への復帰にすぎないが、これだけでも今までよりは広汎な範囲に当事者意識を復帰させるには役立つであろう。そして、これも前にはそうであったのだが、その分掌がおいおい交替されるようにでもなれば、全体として再び会に生氣をとりもど

すことになるであろうと信ずる。なお従前の体制の欠陥についていえば、そもそも会活動の最たるものは、いわずと知れた会誌の発行ということであろうが、その編集会議なるものが、運営責任を負う理事会とさしたる交渉をもちえないという制度的隘路があった。別に両者が意見を異にするとか、全然私的な話がなかったとか、そういうことではないが、やはり欲しいと思うのは、両者打って一丸とした会誌中心の討論であろうと思う。会の生命がよき会誌の発行という認識に立つかぎりである。そういうわけで、どうしても両者はダブリ合う必要がある。このたび編集理事というか、あるいは理事のなかで編集担当を明言化したのはこのような趣旨にでたものであったと思う。たまたま私がそれに当ることになったが、私はそういうものとして解釈している。以上本会に起った若干の変容は、去る十月三日の理事会・評議員会ならびに史学研究大会においても承認されたので、これもまとめて御報告しておきたい。すなわち――

庶務理事 岸 俊男  
会計理事 樋口隆康  
編集理事 越智武臣

#### 編集委員

朝尾直弘、村田修三、荻原淳平、大谷敏夫、阿河雄二郎、須原美士雄、都出比呂志、松尾尊允

#### 会計監事

日比野丈夫 (敬称略)

なお同時に水津一郎、上田正昭両教授が新たに理事となられた。また永く編集委員として御活躍いただいた植松正、大戸千之両氏は、御転勤やその他の御仕事のため交替された。最後に、いままで主として熱田・八幡両氏のお引き受け下さっていた繁務は、これも九月から新たにおこし願った石田貞子女史によって続行されることになった。只今理事長はバりに御講義中であるが、いづれ帰国をまっけて本会もいよいよ軌道に乗ってゆくことであろうと思う。また切にそう願うものである。ところで、十月三日史学研究大会には、会場御車会館において上田正昭・藤縄謙三両氏による東西神話の興味ある御講演を拝聴することができた。実に二年ぶりのことであった。

なお余白があれば『史林』編集のイデー等についても書きたいことはある。しかし、本誌の構成自体がそのイデーの半分は語るであろう。史学科各フィールドの諸研究を、

史学という共通の場に投じうるチャンスはそうあるものではない。それを個別論文の羅列とみるか、そこに自己のフィールドを越えた史的眺望をみるかは、個々人の資質にかかわるものとはいえ、あらまほしきはもちろん後者であろう。ただ編集子としては、今後とも積極的にその眺望の台座はこれを工夫したいものである。(越智記)

☆

☆

一九七一年一月三日印刷 定価三三〇円  
一九七一年一月一日発行

史 林 (第五四卷第六号)

京都市上京区吉田本町  
京都大学文学部内

発行人 史 学 研 究 会

理事長 羽 田 明  
振替京都五一五五番

印刷所

京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇  
中村印刷株式会社

# THE SHIRIN

or the

## JOURNAL OF HISTORY

---

Vol. LIV, No. 6      November, 1971

---

### CONTENTS

#### Articles :

- Kamakura's Relation with the Court  
in Kenkyu Period .....*T. Sugihashi* ( 1 )
- Wei Yüan 魏源: His Political and  
Economic Thought .....*T. Ohtani* ( 33 )
- Industrialization and the British Sugar Colonies.....*M. Kawakita* ( 76 )

#### Notes :

- Reports on the Excavations of the Burial  
Mounds on the Mukôgaoka Hills in Kyoto  
.....*The Research Centre of Archaeology, Kyoto University* (116)

---

*Published*

*by*

THE SHIGAKU KENKYUKAI

*(The Society of Historical Research)*

Kyoto University, Kyoto, Japan